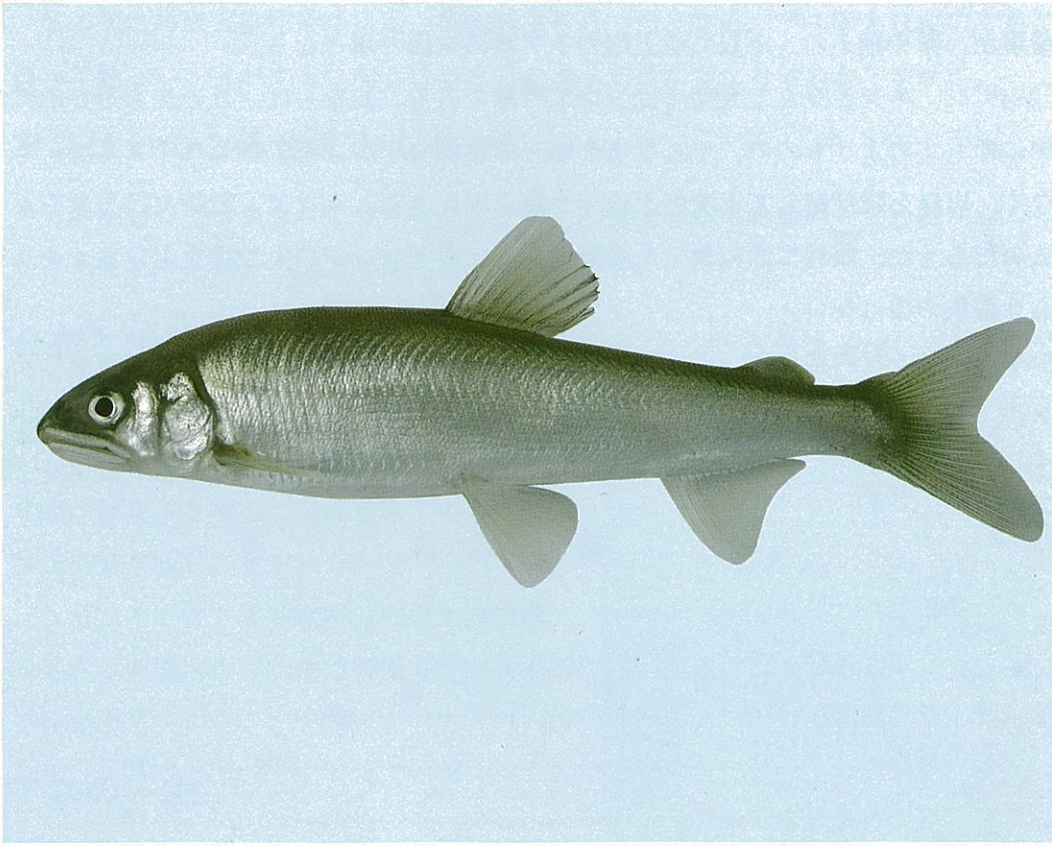
アユ



和歌山県立 自然博物館

はじめに

日本特有の魚でもあるかの様に古くから親しまれてきたアユは、香魚、年魚ともいわれて一般的には鮎と書かれてこれに当ている。

その分布は広く韓国、中国、台湾にもすみ、移殖などを伴って北海道、はては地球の裏がわへも生息する。

風物的にも日本の河川によくまっちして解禁の日を待ちわびる太公望も少くはない。しかし、自然界におけるアユの生活環境たるや、自然の風物に程遠いものがある。それはアユに稼せられた生態によるものだろう。晩秋の河口における産卵場の状況、逆上期における河口の状況、人間社会の発展に置きざりにされ、下水にも似た河口の一番苛酷な環境が、卵や雅子の、そして逆上期の子アユの生活の場となる。

「鮎」デン、ネンと呼んで大陸ではナマズの意である。鯰ならば、日の光も透さぬ泥水の中にでもすめようものの、そんな事を知ってか知らずか、海で捕えた子アユを、あく事なく、川口を躍び越して上流へ上流へと運ぶ車が走る。人々は、風物だけを楽しんでいるのだろうか、鰯程に油の乗った養殖アユが、ガスレンジの上で煙を上げる、そこにはもう香魚の姿はない。

少年の頃に5尺の追竿と、3寸位のタモ網であの敏捷なアユと一対一の対決をした。コケのよくはえた、瀬がなつかしい。

和歌山県立自然博物館
館長　辰喜　洸

目　次

私たちとアユ……1
分布と生態……1
漁具漁法……6
茜屋流……10
海でとられるアユ……10
琵琶湖のアユ……13

私たちとアユ

アユは日本人にとって、古くから親しみの深い魚で、「古事記」や「日本書記」にいくつかの話が書かれています。

「古事記」に神功皇后が新羅との戦いの勝敗を占うため、九州松浦の里で皇后が釣り占いをされたとき、アユが釣れたと書かれています。

このように、アユは日本人とのかかわりの深い魚であり、年魚・香魚・細鱗魚などと書かれていました。現在使われている鮎の字は日本独特のものです。中国では鮎はナマズの意味で、アユは香魚（シャンユイ）と書きます。

鮎の字は神武天皇や神功皇后が戦の勝敗を占ったところ、アユがとれたので魚に占と書いて鮎という字が作られたと言われていますが確かなことはわかりません。

アユはいつごろ生まれたのか

アユがいつごろ生まれてきたのかは、化石が発見されていないので、確かなことはわかりませんが、400～500万年前と言われています。

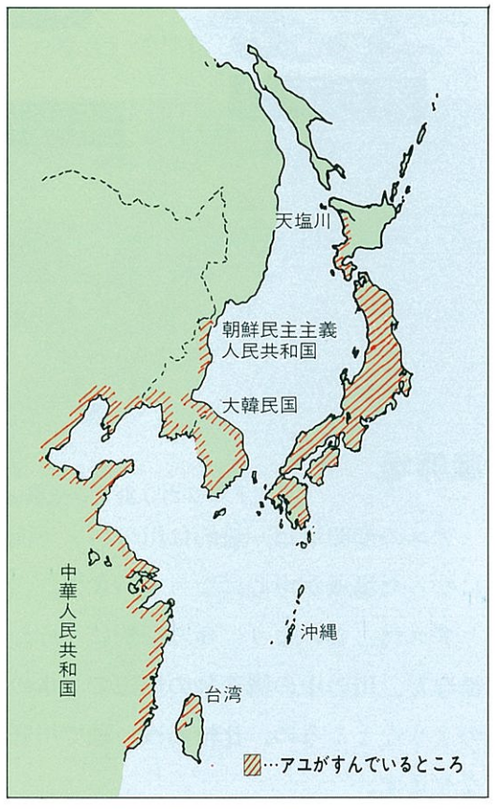
分布と生態

分布

アユは日本固有の魚と言われていますが、実際には日本を中心に朝鮮半島、中国大陸、台湾に分布しています。

日本国内では、北は北海道の日本海側稚内近くの天塩川から、南は沖縄まで分布しています。

分布図



アユの一生

秋に川で生まれたアユは川の流れに乗って海に入り、主に動物プランクトンを食べて成長し、春になって、川と海の水温がほぼ同じになると群を作って川をのぼり始めます。

川に入ってしばらくの間は群を作って川をのぼっていきますが、中流域にくると、あるものは「縄張」を作り「縄張」を作れなか